

イスラーム神秘思想の源流——神名解釈としてのイスラーム思想史——

澤井 真（人間科学専攻）

本研究は、イスラーム神秘思想を、アダム（Ādam）を源流として展開されるさまざまな象徴や物語から考察することを通して、イスラーム思想史を神名解釈という視点から捉え直そうとする試みである。そこで、イスラーム神秘思想の源泉に位置するクルアーン

（al-Qur'ān）から湧き出で、源流として機能しているアダムのさまざまな側面を「アダムの物語」と呼ぶ。そのうえで、いかにスーフィーたち神秘思想家が、その物語を解釈し、自らの議論に取り込みながら思索を紡ぎ出すのかを考察する。

こうした問題設定を踏まえて、本研究は、イスラーム神秘思想の理論的研究（第Ⅰ部）と、具体的テキストの読解とその分析（第Ⅱ部、第Ⅲ部）から構成される。本論の構成は以下の通りである。

序

第Ⅰ部 イスラーム神秘思想研究の分析枠組み

第1章 イスラーム神秘思想をめぐる言説空間

1. 宗教研究にとってイスラーム教とは何か
2. 「神秘主義」概念とその構造——宗教研究とイスラーム教研究における——
3. スーフィズム／イスラーム神秘主義の誕生——起源をめぐる研究史——
4. スーフィズム／イスラーム神秘主義の分類をめぐる正統と異端

第2章 井筒俊彦のクルアーン分析の視座

——アラビア語の *dīn* をめぐる意味論的分析——

1. クルアーンを「読む」
2. クルアーンにおける *dīn* の意味論的分析
3. クルアーンのリトリック的構成とその特徴

第3章 イスラーム思想の源泉としての「アダムの物語」

1. 「アダムの物語」のコンテキスト
2. クルアーン解釈の源泉としての「アダムの物語」

第Ⅱ部 クルアーンの内的な意味を求めて

——源流としての「アダムの物語」とその解釈学的想像力——

第4章 イスラーム教の死生観

——タバリーのクルアーン解釈における2つの生と2つの死——

1. イスラーム思想史におけるタバリーのクルアーン解釈の位置
2. タバリーのクルアーン解釈における3次元
3. 「原初の契約」における神と人間——創造から終末まで——
4. クルアーン2章28・29節における生と死に関する5つの解釈

第5章 ジュナイドの「原初の契約」におけるファナーとバカー

1. イスラーム神秘思想におけるファナーとバカー
2. ファナーの3段階とその意味
3. 「原初の契約」におけるファナーの意味
4. 選良のタウヒードと「原初の契約」

第6章 生と死のはざままで——クシャイリーの神学的・神秘主義的神名論——

1. イスラーム思想史における神名論

2. クシャイリーの神秘主義における神名論
3. 『美麗なる神名注釈』における「生を与える者」と「死を与える者」
4. 『精巧なるものの徴し』における生と死

第Ⅲ部 イブン・アラビーの神名論——存在一性論における神名理解の革新——

第7章 存在一性論における神名

1. スーフィズム／イスラーム神秘主義における「タジャッリー」概念
2. 存在一性論における「タジャッリー」概念
3. カーシャーニーの神名序説

第8章 イブン・アラビーの神名論における存在の自己顕現

1. 慈悲における神的臨在
2. 神名としての「主」とその神的臨在
3. 完全人間における神名の臨在

第9章 つながりの哲学——靈的権威としての完全人間——

1. 『叡智の台座』におけるカリフの位置
2. 完全人間論におけるムハンマドの形而上学的基礎づけ
3. 聖者性と人間完成への道——預言者の継承者たち——

結論

第Ⅰ部では、本研究を先行する宗教学やイスラーム教研究に位置づけながら、分析枠組みを設定している。

第1章では、イスラーム神秘思想における2つの大きな研究枠組みである、「スーフィズム」(Sufism)と「イスラーム神秘主義」(Islamic mysticism)を考察している。1990年代以降、宗教学では「宗教」の概念的再考が進められたが、こうした再考の眼差しは「宗教」概念と密接に結びついた「神秘主義」概念にも向けられたものであった。「宗教」という概念は、近代において、キリスト教が脱自明化され、他の諸宗教と並置される過程のなかで誕生した。すなわち、キリスト教はヒンドゥー教や仏教をはじめとする諸宗教と同じく、「宗教」の下位領域とみなされたのであった。「神秘主義」もまた、こうした近代の産物であった。キリスト教における神秘主義的側面を、他の諸宗教にも「神秘主義」として見出された結果、キリスト教神秘主義を下位領域にもつ「神秘主義」が誕生した。

初期のスーフィー研究は、W・ジョーンズをはじめとするインド研究を嚆矢とする。ここでは、「スーフィー」(sūfi)の語源説が考察された結果、イスラーム教との無関係さを示す「スーフィズム」概念が誕生した。したがって、「スーフィズム」とは、ヒンドゥー教に端を発するものであったり、その他の諸宗教——キリスト教の禁欲主義、仏教の瞑想主義など——から持ち込まれたものであるとみなされた。さらに、イスラーム教の近代化の過程と共働するかたちで、イスラーム教内部では、ワッハーブ主義やサラフィー主義などの改革運動が、スーフィーたちを異端として、イスラーム教外へと排他的に押し出す動きがあった。しかしながら、研究の進展とともに、スーフィーたちはイスラーム教内部に位置づけられ、キリスト教における「神秘主義」に対応するものとみなされた結果、「イスラーム神秘主義」概念が誕生し、「スーフィズム」概念と同義語となった。

このように、「スーフィズム」と「イスラーム神秘主義」の両概念は、イスラーム教の内部と外部による共働の結果として、イスラーム神秘思想という言説空間を形成してきた。そのために、それぞれの異なった背景から誕生した両語のどちらかを、イスラーム神秘思想を形成する分析枠組みとして使用することはできない。そこで本研究では、「スーフィズム／イスラーム神秘主義」と表現することで、分析概念として使用することを提示した。

第2章では、イスラーム神秘思想の源泉であるクルアーンの記述的特徴を明らかにしながら、アラビア語で「宗教」を意味する *dīn* の語を例にとるかたちで、この語がもつ意味の

多層性を明らかにしている。クルアーンは、610年に預言者ムハンマドに対して初めて下され、その後23年間にわたって下された啓示である。「誦むこと」を字義的に意味するクルアーンは、本来的に読み言葉、すなわち言語学で言う「パロール」(parole)であった。しかしながら、3代カリフのウスマーンによって編纂され、書き言葉、すなわち「エクリチュール」(écriture)となった。このテキスト化を通して、クルアーンは多くの読者を獲得し、多くの解釈がなされるようになった。

しかしながら、「宗教」と翻訳されてきたアラビア語の *dīn* の語を例にとるとき、さまざまな意味の広がりをもっているクルアーンにおいて、この語を単に「宗教」と自動的に翻訳することはできない。このことは、クルアーンの翻訳において、*dīn* の語が、「道」や「おしえ」など「宗教」以外の語で、さまざまに翻訳されていたことから理解することができる。それゆえに、井筒俊彦(1914-1993)の言う「読む」という営為が、重要性を帯びて論じられる。アラビア語で下された神の啓示たるクルアーンを、異なった言語や文化を背景とする読者が読むことは非常に難しく、多くの注意を必要とする。井筒の言う「読む」とは、クルアーンが、それ自体に内包する「クルアーンの地平」へと読者が視線を合わせることで、その世界観(Weltanschauung)を理解することである。

こうした井筒の「意味論的分析」に基づいて *dīn* の語を考察するとき、クルアーンにおいて、*dīn* の語は(1)審きと(2)宗教という2つの意味があることが明らかになる。さらに、(2)宗教のなかには、個人的信仰の意味から、組織化された宗教集団の意味へと徐々に意味が広がっていく様子が描かれていた。さらに、こうした「クルアーンの地平」を理解するために、彼が提示した「リアリスティック」、「イマジナル」、そして「ナラティヴ」という3つのレトリックは、クルアーンが多層性とそこから引き出される解釈の多様性を理解するうえで、非常に有用な概念であった。そこで、本研究では特に「ナラティヴ」の次元に関して、イスラーム神秘思想の源流であるアダムを取り巻く一連の記述群を、「アダムの物語」と呼ぶことを提示し、クルアーン解釈がいかに多層的に展開されるのかを分析するための視座を設定した。

第3章では、「アダムの物語」を構成する史料群について記述的に分析する。アダムに関する記述はクルアーンを源泉としながら、ハディース(Hadīth 預言者ムハンマドの言行録)やアサル(athar 教友たちの言行録)、さらにイスラーム教内のさまざまな歴史史料をはじめとして、先行するユダヤ教やキリスト教の啓典など多岐にわたっている。しかしながら、ハディース学におけるテキスト批判に見られるように、こうした史料に対する真偽性の問題や、解釈の相違がある。そのために、「アダムの物語」を構成する資料は、確固とした物語(ナラティヴ)を形成しているわけではない。むしろ、「アダムの物語」とは、語り手となる個々人の取捨選択によって相違があり、異なった記述や解釈などを含めた膨大な語りの総体であることが明らかになった。

クルアーンにおけるアダムは、最初の人間として創造されたが、その際に「凡てのモノの名前」を教えられ、それゆえに地上の代理者に任命される(Q2:30-32)。また「原初の契約」(al-mīthāq)のなかで、アダムの腰から取り出された全人類が、神と主従関係を結ぶことによって、終末において神の前でいかなる言い訳もすることができないことが示される(Q7:172)。さらに、「在れ」と神が言うことによって存在する人間は、まさしく神の被造物である(Q3:59)。こうしたクルアーンでの記述に加えて、他の資料では、アダムは神の似姿で創造されたこと(イマーゴ・ダイ・ハディース *Imago Dei Hadīth*)が示されるなど他の被造物と比べて、さまざまな特権性が付与される。最初の人間として創造され、神話的次元(「イマジナル」の次元)において、さまざまな特性を与えられたアダムは、それ以降の人間の属性と密接に関わる存在である。したがって、「アダムの物語」は、スーフィーたち神秘思想家が、解釈学的想像力を働かせるために重要な役割を果たしており、まさしくイスラーム神秘思想の源流として機能する。

第II部では、「アダムの物語」から「原初の契約」と、生と死に関する議論、さらに神名解釈を取り上げることで、クルアーン解釈の多層性を考察する。

第4章では、初期のクルアーン解釈において先導的な役割を果たしたタバリー (Abū Ja'far al-Ṭabarī, d. 311/923) の考察を通して、字義的なクルアーン解釈を検討する。彼は、自らのクルアーン解釈に、預言者ムハンマドのハディースばかりではなく、彼の教友や後継者たちの伝承を取り込んだ。この意味において、彼のタフスィール (クルアーン解釈) は、「伝承によるタフスィール」 (al-tafsīr bi-l-ma'thūr) に分類される。さらに、クルアーンの一節ごとに連続して注釈を施したという点で、「連続的注解のタフスィール」 (al-tafsīr al-musalsal) とも呼ばれる。こうした枠組みに立つタバリーは、クルアーン解釈の3次元として、神のみが知る解釈、預言者ムハンマドの説明によって行なわれる解釈、そして神の啓示の言語であるアラビア語を解する者が行なうことのできる解釈を挙げている。さらに、彼は解釈の裏付けとしての基準を設定することで、伝承の真偽性を判定しようとした。こうした前代の伝承を吟味することを通して、彼は正しい解釈を導き出すことによって、彼は解釈の客観性を維持しようとした。したがって、彼は個人的見解から行なわれるクルアーン解釈 (al-tafsīr bi-l-ra'y) に極めて否定的であった。

こうした視点は、生と死に関する彼のクルアーン解釈に見出すことができる。生と死の議論は、神の「開始者」、「再生者」、そして「創造者」などさまざまな神名から見出すことができる。「原初の契約」に関する伝承の多くは、予定説的な論調で語られるものが多く、死や終末という視点と密接に結びついていた。タバリーは、イスラームの死生観において論じられる2つの生と2つの死 (Q2:28-29) に関して、伝承に基づきながら、5つの解釈を挙げる。彼は、「原初の契約」を解釈の一つに加えた解釈を、他の一節と矛盾をきたすものとして退けながら、解釈として最も妥当と判断される解釈を導き出した。

第5章では、初期のスーフイズム/イスラーム神秘主義を代表するジュナイド (Abū al-Qāsim al-Junayd, d. 298/910) の神秘思想を分析する。彼は、体験時に発せられる「酔った」言葉ではなく、むしろ体験後の「醒めた」解釈を重視したスーフイーとして知られている。彼の思索において、「原初の契約」は、神的一合の状況を説明するために用いられる。彼は、「ファナー」 (fanā' 消滅) と「バカー」 (baqā' 存続) というスーフイーの専門用語を用いて、神的一合へ到る道程を論じている。「ファナー」の語は、自己のさまざまな属性や感情が取り除かれることによって、最終的に自己そのものまでもが消滅することを意味している。さらに、3段階のファナーを経て、ファナーの後に生じるバカーは、自己が消滅した後に神のなかで存続することを意味している。

さらに、「選良たち」 (al-khāṣṣ) のタウヒード (tawhīd 「神の唯一性の証言」を第一義とするが、スーフイーの文脈では「神的一合」も意味する) において、神の影にすぎない人間は、神のなかで完全に消融する。この状況における神的一合は、人間の存在以前の状況、すなわち、存在以前の「無始の永遠」 (azal) において、神と人間が一つであった状態へ回帰することであると理解される。この合一状況を説明するために、ジュナイドは、「原初の契約」というモチーフを用いながら、「ファナー」と「バカー」の語に幾重にも意味が上書きしながら、神的一合の状況を論じたことが明らかになった。

第6章では、クシャイリー (Abū al-Qāsim al-Qushayrī, d. 418/1072) の神名解釈を通して明らかになる、生と死の新しい理解の地平を考察した。アシュアリー派の神学者であると同時に、スーフイーでもあった彼の視点は、神学的・神秘主義的なものであった。「神は99の名前をもつ」というハディースの一節にしたがって展開された神名解釈は、限定的存在である人間が無限である神を知る方法の一つとして機能している。神名論に関する神学的視点として、クシャイリーは、神の名前を、「名前」 (ism)、「名指し」 (tasmīyah)、そして「名指されるもの」 (musammā) という3つの語彙との関わりをなかで論じる。その結果、彼は、「名前とは名指されるものである」というアシュアリー神学派に沿った主張を行なうとともに、神には「名指し」を帰属させる。こうした主張の背景には、ムッタズィラ派をはじめとする論敵との対峙が隠されていた。彼の神名解釈の方法は、ムッタズィラ派に代表される「タシュビーフ」 (tashbīh 神を人格的に描写すること) と、シーア派

のなかでも特にイスマーイル派に代表される「タアティール」(ta‘tīl 神の非人格化、クルアーンの比喩的解釈)のあいだの中庸をいくことによって進められる。

彼の神名解釈は、彼の神秘家としての側面と、神学者としての側面の両面から行なわれていた。「生を与える者」(al-Muhyī)と「死を与える者」(al-Mumīt)という対をなし、神の生と死に関わる神名に関して、彼は神学的・神秘的注釈を施した。生と死の意味は、単に物理的なものを指すばかりではなく、精神的で比喩的なものも含まれる。生と死をモチーフとした神秘的解釈として、神秘家たちスーフィーにとっての生と死は、神へ近づくために繰り返される象徴的な生と死であった。例えば、無知であることを「死」として、そして神を知ることによって目覚めることを「生」として表現される。さらに、神と合一することで死に、神のなかで自我が取り去られたかたちで生きる。こうした文脈の中で、クシャイリーは、タバリーとは異なる生と死に関する解釈を行なうとともに、ジュナイドと同じように生と死を、「ファナー」や「バカー」の語で表現した。こうした考察を通して、クシャイリーの神秘主義における思索は、本来的に併存しない生と死が神との一体化を通して逆説的に結びつく状況を示すとともに、生と死のはざまを止まることなく揺れ動きながら沈潜されていくものである。

第Ⅲ部では、イブン・アラビー(Muhyī al-Dīn b. al-‘Arabī, d. 638/1240)の存在一性論(Wahdat al-wujūd)を取り上げ、新しい神名解釈を通して見られるクルアーン解釈の革新性を考察した。

第7章では、スーフィズム/イスラーム神秘主義において「自己顕現」を意味する「タジャッリー」(tajallī)概念が、イブン・アラビーの存在一性論において、いかに概念的展開を遂げているのかを明らかにする。イブン・アラビーの存在一性論では、クシャイリーの神名理解とは異なった神名論を展開する。存在一性論は、それ以前の「タジャッリー」(tajallī 自己顕現)概念に、一者から多者への絶対者の存在論的自己顕現という新たな意味を付与した。「第一の自己顕現」(al-tajallī al-awwal)において、存在の最も純粋なレベルである純粋存在は、いかなる言葉でも形容することができない。絶対者が自らを開示することによって起こる存在の流出においては、イスラーム教において絶対的存在であるアッラーでさえも、存在上の頂点に位置していない。むしろ、「アッラー」という名前は、絶対者の自己限定の過程を通して顕われたものとして、アッラーよりも高次の存在とみなされる。第一の自己顕現は、絶対者が「絶対的一性の段階」(al-ḥaḍrah al-aḥadiyyah)において、自己限定を通して「絶対一者」(al-Aḥad)を顕わすことである。

次に、「第二の自己顕現」(al-tajallī al-thāniyy)は、現象として想像可能な全ての存在の源である可能態の祖型が流出することと理解される。「統合的一性の段階」(al-ḥaḍrah al-wāḥidiyyah)において生じるこの存在の開示は、存在論の本質から神的本質へ推移することを通して生じる。そこで、「アッラー」という全ての神名を統合する名前が生じる。このとき、「アッラー」という名前を通して知られる神は、絶対者の神的位置を通しての顕われたものであると理解される。すなわち、統合的一性の段階において、非限定的存在の限定の結果である。他の神名もまた、この神性の段階において現われる。イブン・アラビーやカーシャーニー(‘Abd al-Razzāq al-Kāshānī, d. 730/1329)は、「アッラー」という神名が絶対本質、絶対属性、そして絶対行為という3層から成ることを論じている。こうした考察を通して、神名を中心とする存在一性論においては、「名前とは何か」という問いはまず神名を通してなされ、名前一般へと敷衍される。この意味において、哲学的問いである「名前とはなにか」という普遍的問いに対して、存在一性論のコンテクストからの答えが示される。

第8章では、イブン・アラビーの議論を手がかりに、絶対者が神名との関わりのなかでいかに自らを開示するのかを、『叡智の台座』における議論を中心に考察する。イブン・アラビーは、『マッカ啓示』において100段階の神名を列挙し、その最高次である第1段階に神性の段階である「アッラー」(Allāh)を、第2段階に主性の段階である「主」(al-Rabb)、そして第3段階に慈悲の段階である「慈愛あまねく者、慈悲深き者」(al-Raḥmān, al-Raḥīm)

を置いている。イブン・アラビーは、「ハドラ」というアラビア語を、次の2つの意味で用いている。第1の意味が「段階」であり、第2の意味が「臨在」である。これら2つの意味は、互いに密接に関連しながら「ハドラ」の語を構成している。第1に、「段階」とは、神的存在を次から次へと開示する際の神性の段階を意味する。第2に、「臨在」とは神名の背景にありながらも、神名を通して示されるさまざまな諸性質を意味する。このとき、神名は「臨在」のもつ諸性質を示しながら、名付けられたものとなる。

神名において、「アッラー」の名前は神性を示す最初の名前である。さらに、主を意味する「アル＝ラッブ」という神名と、神を意味する「アッラー」という神名に関して、前者は「アッラー」という名称の外的役割を果たしている一方で、「アッラー」の名前は内的役割を果たしながら、他の神名を内的に統合している。これら2つの名前に続いて、「慈悲」の名が顕われる。神的臨在を通して顕れた「慈悲」は、全ての神名に、存在の本質——「モノ性」(shay'iyah)や「名前性」(asmā'iyah)——となるものを与える。名前とは、その結果として可視的に現われたモノである。イブン・アラビーは、慈悲によって与えられた名前性の後に、名前を獲得する過程を、「準備」(isti'dād)という語で表現した。さらに、「主」という神名は、主従関係を表わすものであり、奴隷たる人間の存在を必然とする。こうした神と人間のあいだの主従関係は解消することはできないが、被造物同士の主従関係は解消することができる。こうした理解にもかかわらず、イブン・アラビーは、両者の主従関係を解消することを可能とする存在を示唆する。その存在こそが、イブン・アラビーの有名な「完全人間」(al-insān al-kāmil)に関する議論であった。

第9章では、神名を体現した存在である完全人間に関する考察を通して、神の名前と被造物である人間の名前との結びつきを考察する。完全人間は、神がアダムに凡てのモノの名前を与え、彼を自らの似姿で創造したゆえに、世界における他の被造物に対して特権的地位に置かれる。このとき、神名を体現する完全人間は、神と宇宙のあいだの仲介者として機能する。完全人間とは神の宝庫の封印であり、隠された神秘知を知る者ゆえに、地上における代理者(狭義の意味での完全人間)となる。アダムの子孫である人類はさまざまな特質を継承している。それゆえに、イブン・アラビーは、アダムの子孫である人間が、生まれつきの〈完全人間〉(広義の意味での完全人間)であるとみなしている。しかしながら、人間の霊的な高さは、恩寵として予め与えられた預言者や使徒を除くならば、基本的に人間にとって本質的なものではなく付随したものである。この意味で、この霊的な高さはさまざまな霊的修養を通して獲得されていくものである。

預言者ムハンマドがもつ唯一無二という叡智は、彼が使徒の封印であり、「ムハンマド的実在」(al-ḥaqīqah al-Muḥammadiyyah)というかたちでアダムに先行する存在論的特権性をもっていることの証しである。アダムは最初人間として創造されたにもかかわらず、ムハンマドは存在論的にアダムに先行しているために、存在一性論において彼はアダムに時間的にも先行する。イブン・アラビーによれば、アダムに連なる全ての預言者たちが、ムハンマド的実在を共有しているという。それゆえに、彼らはアダムが体現した完全人間の叡智を共有し、隠された神秘知を保持することを通して、神の宝庫の封印となり、世界を維持した。ムハンマドの死後、人々は隠された神秘知を求め、聖者となる。聖者は預言者の後継者であり、彼らは真知者として、神の叡智を保持することによって宇宙を維持しつづける。

結論では、これまでの考察を踏まえながら、スーフィズム／イスラーム神秘主義におけるクルアーン解釈の意味に言及した。スーフィーたち神秘思想家は、クルアーンを源泉とし、ハディース、さらに先行するイスラーム諸学に基づきながら、自らの体験に根差す思索を深めていった。その際、「アダムの物語」は神と人間のつながりを見出すための契機となり、さらに神名解釈は神とのつながりを深化させる重要な手がかりであった。イスラーム思想史とは、彼らがイスラーム神秘思想の源流へと絶えず回帰することによって、クルアーンの新たな解釈の地平を拓いた営為の蓄積であった。

